

幼児の父親が抱く子どもの意味と価値

山口 雅 史*

The meaning and value of children in fathers

Masafumi YAMAGUCHI

問題と目的

子どもとはいったい何だろうか。従来子どもの発達の一環境要因として扱われてきた親に注目が集まり、近年、親を対象とした研究が盛んに行われている。その先駆けとも言える新谷・村松・牧野（1993）は、幼児から青年までの子を持つ親を対象に、親になることによって〈親としての自覚〉〈人間としての成熟〉〈ストレス〉の3つの側面で変化が生じることを示した。同様に、親になることによる心理・行動上の変化・発達を検討した柏木・若松（1994）は、作成した尺度の分析から〈柔軟さ〉〈自己抑制〉〈運命・信仰・伝統の受容〉〈視野の広がり〉〈生きがい・存在感〉〈自己の強さ〉の6つの因子を抽出している。このように、親になることに伴う発達については多くの研究が行われてきているが、なぜ人は子どもを産み、育てているのかについてはあまり興味が向けられてはいない。

ヒトという種が地球上に誕生して以降、数百万年の長きにわたり、われわれは子を産み、育ててきた。それは哺乳類としての個体保存、種保存の生存欲求によることは間違いないが、他種に比べ特異的に発達した認知機能を持つわれわれ人類は、子産み・子育てという行為をどのように認知し、解釈してきたのだろうか。おそらく、子どもや子どもを持つことに対して肯定的な価値を見出したからこそ子産み・子育てという行為が綿々と続いてきたと推測されるが、だとしたら、近年のわが国における少子化傾向は子どもに対する肯定的な価値が揺らいでいることの表れだとも考えられる。では、現代の親達は、子どもや子どもを持つことに対してどのような意味や価値を見出しているのだろうか。

柏木・永久（1999）は、子どもを産む際の考慮理由や動機を調査することで、女性が子どもを産む意味について検討を行っている。40歳と60歳の母親を対象とした質問紙調査を行い、子どもを産む際の動機として〈情緒的価値〉〈条件依存〉〈自分のための価値〉〈社会的価値〉〈子育て支援〉の5つの因子を明らかにした。

柏木らはこれらの結果を親が意識している“子どもの価値”として捉えている。しかし、このうち〈条件依存〉は「経済的ゆとりができたので」「夫婦関係が安定した」「二人だけの生活は十分楽しんだ」等の項目から構成される因子で、子産みの“理由”というよりも子産みを決意するための“条件”と捉えるべきものであろう。同様に、「住宅事情が整ったので」「よい保

*人間関係学科 教授

育園があったので」「子育てを手伝ってくれる人がいたから」等で構成される〈子育て支援〉も、子育てを支援してもらえる条件が整ったことにより子産みを決意している点でやはり子産みの“条件”として理解する方が自然である。

これらを除いた3因子からは、母親が子どもに対して何を期待しているのかを読み解くことで母親が子どもにどのような価値を見出しているのかを推測することができる。〈情緒的価値〉は「年取ったとき子どもがいなくて寂しい」「家庭がにぎやかになる」「子どもを持つことで夫婦の絆が強まる」等の項目で構成されている。そこから、家庭や夫婦に安心感やにぎやかさをもたらす、夫婦間の絆を強めるといった“家族や家庭に求心力をもたらす”という価値を子どもに見出している姿が推測される。

また、〈自分のための価値〉には「子どもを育ててみたかった」「子育てで自分が成長する」「女性として妊娠、出産を経験したかった」という項目が含まれ、子育てや妊娠、出産にあこがれる様子がうかがえ、母親らはそれらの衝動を成就させることができるという価値を子ども（というより、子どもを産み育てること）に見出しているという点で〈個人的価値〉と命名されている。しかし、なぜこのような衝動を彼女たちが抱いているのかを考えると、子どもを産む性である女性としての、換言すればヒトという哺乳類のメスとしての種保存の欲求がその背景にあると解釈することもできる。言わば、“生物としての基本的欲求を満たす”という価値を見出しているのかもしれない。

さらに、「子を産み育ててこそ一人前の女性」「次の世代を作るのは、人としてのつとめ」「姓やお墓を継ぐものが必要」等の項目からなる〈社会的価値〉は、子どもを産み育てることに対して社会的に付与された価値観を反映しており、先祖から続く血筋や家系の一構成員という立場から“社会的存在としての自己の位置づけを確認する”という価値を見出している様が伺える。

永久・柏木・姜（2004）は日韓の比較研究の中で父親の認識する子どもの価値を第一子を持つことに決めた理由という観点から検討し、3つの因子を抽出している。1つは「経済的ゆとりができたから」等の柏木・永久の〈子育て支援〉に相当する項目を含んだ〈条件依存〉、2つめは「子育てがしたかった」等の〈自分のための価値〉、3つめは「血のつながった存在がほしい」等、柏木・永久の〈情緒的価値〉を含んだ〈社会的価値〉である。

このように子どもを産み育てることを親が決定する理由や条件については研究が行われているが、子ども、あるいは子どもを持つことに対して、親がどのような意味や価値を見出しているのかについてはまだ明確な知見は得られていない。

筆者はこれまで、親になる過程を“親同一性”という視点から検討を加えている中で（山口，1997；山口，2001；山口，2003），子どもを育てることが自分にとってどのような意味を持っているかについて、母親、父親それぞれを対象に検討してきた（山口，2005；山口，2006）。これら一連の研究の中で、今回は父親を対象とし、子どもという存在に対して彼らがどのような意味や価値を抱いているのかを検討することを目的とする。

方 法

（1）調査内容

「次の文章は未完成です。あなたの気持ちにぴったりのような、好きな文章を続けて完成させてください」という教示のもと、「子ども」とは、「」という語の後に下線だけ引いた空欄を設け、自由に記述させる文章完成法を用い、回答させた。

(2) 調査手続き

調査は、愛知県名古屋市の公立幼稚園1園、愛知県岡崎市の私立幼稚園1園の在園児の父親を対象として実施した。調査実施時期は、2004年10月である。

本調査は、複数の調査項目（親同一性尺度等）をまとめて1つの調査票にしたものの一部として実施し、各クラス担任を通じて配布回収するという手続きを取った。

372部を配布し、回収したのは280部。したがって回収率は75.3%であった。回収した280部のうち、回答に不備のあった8部に関しては分析から除外し、残り272部について分析の対象とした。

(3) 回答者の属性

父親の年齢の平均は37.8歳で、26歳から55歳であった。子どもの数の平均は2.0人であり、1人から4人の子どもを持っていた。長子の年齢は平均6.2歳（3歳から21歳）、末子の年齢は平均3.4歳（0歳から6歳）であった。

対象者272名のうち、常勤で勤務している者は271名（99.6%）で、1名（0.4%）が就労していなかった。さらに、対象者の最終学歴の内訳は、中学・高校卒66名（24.3%）、専門学校・短期大学卒28名（10.3%）、大学・大学院卒178名（65.4%）であった。

また、配偶者272名のうち、常勤で勤務している者6名（2.2%）、パートタイム勤務している者36名（13.2%）で、230名（84.6%）が就労していなかった。配偶者の最終学歴は、中学・高校卒61名（22.4%）、専門学校・短期大学卒119名（43.8%）、大学・大学院卒92名（33.8%）であった。

結果と考察

記述された意味内容に基づき分析を行った。

回答は文章を記述する形式でなされたため、複数の意味内容を含んでいる場合がある。その場合は意味内容を変えない範囲で文章を分割し、一つの切片には一つの意味内容しか含まないように留意しつつ、複数の切片に切り分けた。したがって分類に使用した切片化された記述の総数は346となり、対象者数272（うち、無回答21）を上回っている。

切片化された記述を一つの単位として意味内容の類似性に基づき分類を行った。その結果、全部で25のカテゴリーに分類され、さらにそれらは7つのカテゴリー群に統合された（Table 1参照）。各カテゴリー群の割合を示す百分率は、記述総数に対する各カテゴリー群に分類された記述数の割合の形で示してある。

以下、カテゴリー群ごとに考察を行っていく。

(1) 無条件の価値

最も記述数の多いこのカテゴリー群は、「かけがえのない宝物」「宝石の原石」等の〈宝物〉、「自分の命より大事なもの」「すべてをかけて守るもの」等の〈大切なもの〉、「無邪気で可愛い」「可愛い」等の〈可愛いもの〉、「妻との宝であり我が家の誇り」「夫婦の宝」等の〈両親にとっての宝物〉、「国の宝」「人類の宝」等の〈社会にとっての宝物〉の5つのカテゴリーが分類された。このカテゴリー群を《無条件の価値》と名付けた。

カテゴリー群中、最も記述の多かった「宝物」という表現からもわかるように、父親達は子どもを何物にも代えがたい大切なものであると捉えている。それは自分にとってはもちろんのこと、自分と妻両方にとっての宝物であると同時に、個人を超えたいわば公的な宝物、すなわ

Table 1 切片化された記述の分類（数字は記述数，（ ）は百分率）

カテゴリー群	記述数	カテゴリー	記述数	記 述 例
無条件の価値	90 (26)	宝物	45	「かけがえのない大切な宝」「宝物」「宝石の原石」
		大切なもの	19	「愛を与え続ける命」「全てをかけて守るもの」 「自分の命より大事なものの」
		可愛いもの	12	「無邪気で可愛い」「可愛い」「愛おしい」
		両親にとっての宝物	7	「妻との宝であり我が家の誇り」「夫婦の宝」 「家族の宝」
		社会にとっての宝物	7	「国の宝」「人類の宝」「社会の宝」
自身をかえりみる機会	85 (25)	親を映す鏡	38	「親を映す鏡」「鏡の中の自分」「自分を映す鏡」
		自分自身の分身	28	「自分の生まれ変わり」「自分自身の分身」 「夫婦それぞれの分身」
		成長させてくれるもの	13	「私の事も成長させてくれる存在」「学ぶべき対象」 「反面教師」
		昔の自分	6	「原点を思い出させてくれる存在」「昔の自分達」 「昔の自分を思い出させてくれる存在」
情緒的な価値	49 (14)	生きがい	16	「生きがい」「人生そのもの」
		元気の源	13	「生活の励み」「元気の源」 「仕事をする上での活力」
		癒しをもたらすもの	7	「精神安定剤」「心の支え、お守り」 「心の疲れを癒してくれる」
		アンビバレントな存在	7	「幸せと重荷のカオス」 「かわいい時と生意気な時と常に変化」 「喜び、悲しみ、怒りなどを与えてくれる」
		楽しみをもたらすもの	6	「楽しみ」「幸せを与えてくれる」 「優しい気持ちにさせてくれる」
未来への可能性	49 (14)	無限の可能性	21	「可能性の塊」「あらゆる可能性をもつ」 「無限の可能性を秘めている」
		未来を担うもの	19	「未来への種子」「次世代を担う存在」「希望」
		成長するもの	9	「人間性を学ぶ」「勉強をするもの」 「立派な人間になる為の成長期」
家族としての関係性	44 (13)	家族の絆	17	「家庭において中心的存在」「大切な家族」 「夫婦間、地域間等全てのかすがいい」
		独立した人格	13	「一人の独立した人格」「自由な存在」 「個であり、親の所有物ではない」
		教え導くべきもの	11	「自分の精一杯できる事を教え伝えていく」 「親の背中を見て成長していく」「責任」
		遺伝子を継ぐもの	3	「自分の命を引き継ぐもの」「自分のDNAの継承者」 「自分の遺伝子を持つ子孫」
中立的な記述	22 (6)	不思議な存在	11	「大人とは全く異なる存在」「摩訶不思議な玉手箱」 「思いがけない発想をする」
		純粋な存在	7	「非常に繊細な心を持っている」 「まっ白で純粋」「純粋無垢」
		人間の原点	4	「人間の原点であり、最も人間らしい人間」 「どこにでもいるありふれた存在」 「自分の中に自然にあるもの」
その他	7 (2)	その他	7	
合 計	346 (100)			

ち社会にとっての宝物でもある。このカテゴリー群には全記述の26%が含まれており、父親が子どもを無条件で価値あるものと捉えている様子がうかがえる。

柏木・永久(1999)が母親の中に見出した〈情緒的価値〉は、家族や家庭に求心力をもたらすことを子どもに期待したものであった。同様に、〈個人的価値〉は子どもを育ててみたかったという個人的動機に動かされたものであり、〈社会的価値〉は社会的存在としての自己の位

置づけを確認しようとする親の思いによるものである。これらはいずれも、子どもが、あるいは子どもを持つことが、母親に対して何らかの利益をもたらすが故に子どもを産むことを決意したことを示唆している。この点では、永久ら(2004)が父親を対象に明らかにした〈条件依存〉〈自分のための価値〉〈社会的価値〉という3つの子どもの価値も同様である。

これに対し、本研究の《無条件の価値》では、子どもが親に何かをもたらすことを期待してはいない。「かけがえのない」「世界で一番大切な」「無償の愛を注ぐ」等の修飾語句にも表れているように、ここで語られているのはまさに無条件で子どもの価値を認めている父親の思いである。

この違いは、先にも触れたように柏木・永久(1999)、永久ら(2004)が明らかにしたのは“子どもの価値”ではなく、“子どもを持つことを決めた理由”であったからかもしれない。子どもという存在に対して親が素朴に見出す価値は、ここで示されたような無条件の価値なのではないだろうか。

(2) 自身をかえりみる機会

《無条件の価値》と同程度の記述が分類されたのが《自身をかえりみる機会》というカテゴリー群である(記述総数の25%)。「親を映す鏡」「鏡の中の自分」等の〈親を映す鏡〉、「自分の生まれ変わり」「自分自身の分身」等の〈自分自身の分身〉、「私の事も成長させてくれる存在」「学ぶべき対象」等の〈成長させてくれるもの〉、「原点を思い出させてくれる存在」「昔の自分達」等の〈昔の自分〉の5つのカテゴリーが分類された。

この中で最も多いのは〈親を映す鏡〉というカテゴリーである。「親を映す鏡」「鏡の中の自分」という表現からは、子どもの姿の中に自分自身の姿を投影している様子が見て取れる。これは「自分自身の分身」や「自分の生まれ変わり」等の〈自分自身の分身〉カテゴリーでも同様である。〈親を映す鏡〉カテゴリーでは、単に「自分によく似ている」という表現を使うのではなく、あえて“鏡”という表現を使った記述がほとんどである。おそらく、この場合の“鏡”には、そこに映った姿を見つめることで自分自身の態度や行為を省みる、という比喩的な意味が込められているのであろう。〈自分自身の分身〉カテゴリーも同様で、容姿が似ているということだけに留まらず、わが子の性格や態度にも自分とよく似た点があることを見出し、それにより自らの態度や言動を振り返り、何かしらの内省的な自己評価を行っている父親の姿が想像できる。これと同様の傾向は、〈成長させてくれるもの〉カテゴリーにみられる「学ぶべき対象」や「反面教師」という記述にも表れている。

子どもを育てることで「自分の性格や考えを見つめ直すようになった」という項目は、森下(2006)や高橋・高橋(2008)が行った、親になることに伴う発達の様相を検討した質問紙調査でも〈子どもを通しての視野の広がり〉と命名された因子の中に含まれており、子どもの姿により内省的な自己評価を行うことは親になる過程で生じる一般的な傾向であると考えられる。

とは言え、反省的に“省みる（かえりみる）”ばかりではなく、自らの子ども時代の姿をわが子に重ね、幼少時を思い返すという意味で“顧みる（かえりみる）”様子もうかがえる。〈昔の自分〉カテゴリーでは、「昔の自分を思い出させてくれる存在」「私が小さかった頃そのもの」というように、どこか懐かしい郷愁を感じさせるような目で子どもをとらえている姿が見受けられた。この点は、森下（2006）、高橋・高橋（2008）で〈過去と未来への展望〉因子として取り出された「自分が子どもの頃を思い出すようになった」等の項目との類似性を見出せる。

（3）情緒的な価値

このカテゴリー群には、子どもに対して何らかの情緒的な価値を見出している5つのカテゴリーが分類された。「生きがい」「人生そのもの」等の〈生きがい〉、「生活の励み」「元気の源」等の〈元気の源〉、「精神安定剤」「心の支え、お守り」等の〈癒やしをもたらすもの〉、「幸せと重荷のカオス」「可愛い時と生意気なときと常に変化」等の〈アンビバレントな存在〉、「楽しみ」「幸せを与えてくれる」等の〈楽しみをもたらすもの〉である。

このうち、〈生きがい〉や〈元気の源〉カテゴリーの記述からは、子どもという存在が父親自身の人生や仕事を初めとする様々な活動への動機づけを高める効果があることがうかがえる。これらのカテゴリーは、永久ら（2004）で〈自分のための価値〉因子を構成するとされた「子育ては生きがい」や「家庭がにぎやか」という項目と通じるところがあり、永久らのようにこれを“子どもを持つ理由”と解釈すれば、父親自身のための価値と捉えられなくもない。しかし、父親らは必ずしも自らの人生を充実させることを目的として子どもを設けたわけではないのではないだろうか。本研究の父親のように、子どもという存在に対して《無条件の価値》を抱いているからこそ子どもを産むことを決意し、そうして得たわが子を育てるうちに、子どもに〈生きがい〉や〈元気の源〉といった《情緒的価値》を見出すに至ったと考えるべきであろう。

一方、「幸せを与えて」くれ「優しい気持ちにさせてくれる」という〈楽しみをもたらすもの〉カテゴリーや、「精神安定剤」や「お守り」として「心の疲れを癒してくれる」といった〈癒やしをもたらすもの〉カテゴリーからは、子どもという存在が父親の抱える様々なストレスを緩和する効果を持つことも示唆されている。このように、子どもという存在が父親にとって非常に肯定的な《情緒的価値》を持つ存在であることが推測される。

ただ、すべての父親が手放しで子どもを肯定的に捉えているというわけではなく、子どもがもたらす否定的な側面についての記述もみられる。例えば、「幸せと重荷のカオス」や「時として私の気持ちを逆なですが、一言で私の気持ちを癒してくれる」等である。とは言え、これらの記述はすべて肯定的な側面への言及と対をなしており、子どもが父親にとって否定的な存在であるだけではなく、むしろ、否定、肯定の両側面を合わせ持ったアンビバレントな存在であることを示していると考えられる。

（4）未来への可能性

このカテゴリー群には、子どもを発達途上の未完成の存在であると捉えた3つのカテゴリーが分類された。「可能性の塊」「無限の可能性を秘めている」等の〈無限の可能性〉、「未来への種子」「次世代を担う存在」等の〈未来を担うもの〉、「人間性を学ぶ」「立派な人間になるための成長期」等の〈成長するもの〉である。

最も記述数の多い〈無限の可能性〉カテゴリーの記述は、子どもの持つ多様な可能性に着目したものである。それに続く〈未来を担うもの〉カテゴリーには、「未来を築く宝物」「無限の

夢を与えてくれる人」「未来への種子」等、明るく幸福な未来を創造してくれることへの期待を込めた表現が見られ、子どもの持つ無限の可能性が肯定的に語られている。あわせて分類した〈成長するもの〉カテゴリーは、上記2カテゴリーの肯定的な記述とは少し異なり、「立派な人間になるための成長期」や「大人になるための準備期間」等の現象記述的な中立表現に留まっている。

以上の3つのカテゴリーからは、発展途上ではあるが未来を担う存在としての無限の可能性を子どもの中に見出している父親の姿が読み取れる。先にあげた森下(2006)、高橋・高橋(2008)の〈過去と未来への展望〉因子には、過去の自分と自分の親の関係に関する項目や子どもの頃の自分を思い出す項目は含まれているが、因子名にあるような“未来への展望”はわずかに「自分と親との関わりを思い出し、自分の将来と子どもとの関わりを想像するようになった」という語句にしか見られない。一方、柏木・永久(1999)や永久ら(2004)にも、「次の世代を作るのは親のつとめである」という社会規範を取り込んでいることを示すような項目はあるが、本研究のような輝かしい未来への可能性を子どもの中に見出している項目は見当たらなかった。

ここに見られる子どもの中に未来への限らない可能性を見出している記述は、《自身をかえりみる機会》カテゴリー群中の〈昔の自分〉、次に考察する《家族としての関係性》カテゴリー群に分類された〈遺伝子を継ぐもの〉と共に、過去から未来へと続く時間軸に立ってわが子という存在を受け止めようとしている父親の姿を表しており、今後の検討に向けての重要な示唆を含んでいる。

(5) 家族としての関係性

親子や家族という子どもとの関係性に注目したカテゴリーを分類したものが《家族との関係性》カテゴリー群である。「家族において中心的な存在」「夫婦間、地域間等全てのかすがいい」等の〈家族の絆〉、「一人の独立した人格」「個であり、親の所有物ではない」等の〈独立した人格〉、「自分の精一杯できる事を教え伝えていく」「責任」等の〈教え導くべきもの〉、「自分の命を引き継ぐもの」「自分のDNAの継承者」等の〈遺伝子を継ぐもの〉の4カテゴリーである。

中でも最も記述数が多いのは〈家族の絆〉カテゴリーである。子どもは「家族の中で最も愛すべき存在」「家族の中心的存在」であるとする記述や、「人生のパートナー」「夫婦や地域のかすがいい」であるとする記述が見られ、子どもという存在が夫婦や家族、さらには地域までをも繋ぐ絆の要としての役割を果たしていると捉えられている。

これらとよく似た「(子どもを持つことで)夫婦の関係(絆)が強まる」という項目が、柏木・永久(1999)では母親の〈情緒的価値〉因子の中に、永久ら(2004)では父親の〈自分のための価値〉因子の中に見出される。ただ、どちらの研究でも「家庭がにぎやかになる」という項目もそれぞれ同じ因子中に含まれていることを考えると、やはり本論の問題の中でも指摘したように、親の抱くこれらの思いは“自分のための価値”や“情緒的価値”というよりも、“夫婦や家族間の絆を強め、家族や家庭に求心力をもたらし価値”を子どもに見出していると考えべきであろう。

このカテゴリー群には、子どもを親に従属した存在と捉えるのではなく、一個の独立した人格を持つ存在として認め、接すべきであるとする〈独立した人格〉カテゴリーや、子どもは親が責任を持って指導や教育にあたるべきであるとする〈教え導くべきもの〉カテゴリーが含まれている。親による養育とは、子どもの独立した人格を尊重しつつ社会に適応すべく教え導

いていくものであることを考えると、いずれのカテゴリーも家族内における父親と子どもの関係性という視点から子どもについて述べている点で共通している。

また、「自分の DNA の継承者」「自分の命を引き継ぐもの」からなる〈遺伝子を継ぐもの〉カテゴリーもこのカテゴリー群に分類された。「血のつながった存在がほしかった」という項目は、柏木・永久（1999）では母親の〈情緒的価値〉因子に、永久ら（2004）では父親の〈社会的価値〉因子にそれぞれ含まれているが、むしろ時代を超えた家族（家系）を意識するという点で、《家族としての関係性》カテゴリー群に分類する方がよりふさわしいと考えられる。

（6）中立的な記述

子どもという存在を現象記述的な表現で中立的に記述した3つのカテゴリーを集めたものが《中立的記述》カテゴリー群である。「大人とは全く異なる存在」「摩訶不思議な玉手箱」等の〈不思議な存在〉、「非常に繊細な心を持っている」「まっ白で純粋」等の〈純粋な存在〉、「人間の原点であり、最も人間らしい人間」「どこにでもいるありふれた存在」等の〈人間の原点〉である。

成人とは異なる幼児の特徴的な姿を不思議な存在として表現した〈不思議な存在〉、大人になるにつれ失われてきた純粋さに着目した〈純粋な存在〉、その純粋さ故か、子どもの姿に人間の原点を見た〈人間の原点〉の3カテゴリーに含まれる記述は、いずれも一步距離を置いたかのような客観的な視点で子どもを捉えており、育児への関与度が低い父親に特徴的な反応なのかもしれない。

本研究の父親達の配偶者のうちパートタイムを含めて就労している者はわずか15%に過ぎず、全体の9割近くがいわゆる専業主婦であると考ええると、自ずと育児の比重も妻に偏っているのではないかと想像される。そのため、日常的な育児への関与度の低さがこのような客観的な表現をもたらしていると考えられる。

まとめ

本論は、幼児期の子どもを持つ父親を対象とし、彼らが子どもという存在にどのような意味や価値を見出しているのかを検討したものである。その結果、父親達は以下の6つのカテゴリー群に示されるような意味づけを子どもに対して行っていた。すなわち、《無条件の価値》《自身をかえりみる機会》《情緒的な価値》《未来への可能性》《家族としての関係性》《中立的な記述》である。

これらのうち《無条件の価値》と《情緒的価値》からは、父親が子どもという存在に対して非常に肯定的な受け止め方をしていることが読み取れる。何らかの条件に依存するのではなく、あたかもア・プリオリに高い価値が子どもに付与されているかのような記述が多く見られた。

また、《自身をかえりみる機会》《未来の可能性》《家族としての関係性》には、子どもが父子のみならず家族を繋ぐ絆としての役割を果たしていることが、まさに「子はかすがい」という慣用句そのままに示され、父親達が家族の求心力としての意味や価値を子どもに見出している事が明らかになった。同時に、これらのカテゴリー群からは、子どもという存在を通じて過去を振り返り、未来を展望する父親の姿も見出された。

一方、《中立的な記述》に見られたのは、子どもから一步距離を取って客観的に描写された記述であった。このことから、育児を妻に任せ、自らが育児の主体とはなり得ていない父親の姿が推測された。

今後は、同様の分析を母親に対しても行い、両者を比較検討しながら、親が子どもという存

在にどのような意味や価値を見出しているのかをさらに検討していく必要がある。

引用文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達－生涯発達の視点から親を研究する試み－, 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値－今, なぜ子を産むか－, 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 森下葉子 2006 父親になることによる発達とそれに関わる要因, 発達研究, 17, 182-192.
- 永久ひさ子・柏木恵子・姜蘭恵 2004 父親における子ども価値と子どもを持つ負担感－日韓比較研究－, 文京学院大学研究紀要, 6, 43-59.
- 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男 1993 親の変化とその規定因に関する一研究, 家庭教育研究所紀要, 15, 129-140.
- 高橋道子・高橋真実 2009 親になることによる発達とそれに関わる要因, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 60, 209-218.
- 若松素子・柏木恵子 1994 「親になること」による発達－職業と学歴はどう関係しているか－, 発達研究, 10, 83-98.
- 山口雅史 1997 いつ, 一人前の母親になるのか?－母親のもつ母親発達観の研究－, 家族心理学研究, 11, 83-95.
- 山口雅史 2001 親同一性を構成する3つの次元－幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造－, 家族心理学研究, 15, 79-91.
- 山口雅史 2003 子ども優先度及び育児効力感が母親同一性形成に及ぼす影響, 愛知教育大学研究報告 52 (教育科学編), 39-44.
- 山口雅史 2004 “親である”ってどういうこと?－母親を対象とした親であることの意味に関する考察－, 愛知教育大学研究報告 53 (教育科学編), 47-52.
- 山口雅史 2006 幼児の父親を対象とした“子育て”の意味に関する調査, 愛知教育大学研究報告 55 (教育科学編), 29-34.